

きのこ

1 害菌対策

害菌汚染は、減収や品質低下をもたらして、経営に大きく影響します。すでに実施されている対策を再確認するとともに、不備があれば、早めに、必ず改善していきましょう。

○エノキタケ 黒腐細菌病（黒腐れ症状・褐変症状）

症状 ……シュードモナス・トラシー（細菌）による

菌かき後から芽出し期に感染した場合は、菌床面に黒いアメ状の液が発生（写真1）、また、芽出し直後の子実体は黒く腐敗します。生育中に感染した場合は、傘等が褐変症状を呈します（写真2）。

原因

細菌が水滴や塵に付着して空中伝染や、菌掻き機による接触伝染と考えられます。また、生育期の感染では、汚染した巻紙による場合も想定されます。いずれも湿度が高く結露しやすい室内環境、殺菌不足により菌糸の活力が弱まった場合に感染が助長されます。

対策

施設内に害菌が存在していることを前提として、日常から過度の加湿を避け、菌掻き機や加湿器、巻紙の除菌を励行することが重要です。

○エノキタケ 桃色かび立枯病（通称 ピンク）

症状 ……スピセルム・ロゼウム（糸状菌）による

芽出し期に菌床面が毛足の短い菌糸に覆われて芽が立ち枯れ症状となります（写真3）。また、薄いピンク色の胞子が大量に生じて感染の拡大を招きます。多くの場合、前述の黒腐れ病を併発します。

対策

早期に発見し、室外に持ち出して加熱殺菌処理を行うとともに、接種室、培養室、芽出し室の除菌・浄化を励行し、胞子の飛散を防ぎます。

また、菌掻き機による伝染の場合もあるため、菌掻き機の刃の洗浄も忘れずに行うことが重要です。

○エノキタケ・ブナシメジ わたかび病（立枯症状）

症状 ……クラドボトリウム・バリウム（糸状菌）

エノキタケの他、ブナシメジでも発生します。感染後は毛足の長い白い菌糸が子実体を覆って萎ちよう枯死させます（写真4）。芽出し～生育期に子実体への感染の拡散後に発見されますが、培養中に汚染しているケースもみられます。

原因

掻き出し作業時の害菌胞子が空気中へ大量飛散により、冷却～接種室、あるいは、菌掻き～芽出し室に侵入、感染している場合が多くみられます。殺菌後の放冷～接種、芽出し室と掻き出し場所の隔離が最大のポイントになります。

対策

培地殺菌以降の放冷、接種、培養、菌かき、芽出し、エノキタケの抑制等の各工程での除菌・浄化管理を徹底する必要があります。また、害菌の胞子は非常に飛散しやすく、汚染が拡大しやすいため、汚染ピンは胞子を飛散させないように静かにビニール袋などに封入して室外へ持ち出し、滅菌処理します。対策の遅れは甚大な被害になるため特に注意が必要です。

2 キノコバエ対策

野生のきのこがなくなるこの時期は、収穫後にきのこが残っているビンや収穫残渣もキノコバエを誘引します。午前中、早いうちに収穫し、収穫後のビンはその日のうちに掻き出し作業を行いましょう。また、収穫残渣を一時保管する場合は、フタ付きのゴミ箱を使用します。また、雨が当たるような場所に置かないようにしてください。栽培室等への出入り時にも侵入しますので十分注意してください。



写真1 黒腐細菌病（芽出し期）



写真2 黒腐細菌病（生育期）



写真3 桃色かび立枯病



写真4 わたかび病